愛知県田原市

資料No.2－1

●発表日：平成 28 年（2016 年）10 月 21 日

国民文化祭・あいち2016関連
「渥美半島の縄文文化をさぐる」田原市関連事業について

「第３１回国民文化祭・あいち２０１６」が、平成２８年１０月２９日から１２月３日までの３６日間にわたり、愛知県内各地において盛大に開催されます。
国民文化祭は、国民の皆様方が日頃から行っている文化活動を全国的な規模で発表、競演し、交流する国内最大の文化の祭典として、昭和６１年の第１回から回を重ね、今回の愛知大会で３１回目となります。

田原市では、この「第３１回国民文化祭・あいち２０１６」に関連する催しとして３つの分野（「美術」・「歴史文化」・「文化一般」）で事業を実施します。

美術の分野では、田原市博物館が秋の企画展「万葉千首完成５０　鈴木翠軒の書　～万葉の世界～」を実施します。

歴史文化の分野では、田原市教育委員会文化財課が「渥美半島の縄文文化をさぐる～海をめぐる渥美半島の魅力～」をテーマとした企画展やシンポジウム、座談会などの企画を実施します。

そして文化一般の分野では、田原市文化協会が愛知県文化協会連合会東三河支部の文化協会に加盟する団体が芸能を披露する「愛知県文化協会連合会　東三河支部芸能大会」を実施します。

各事業の内容や開催日などについては、下記のとおりです。

１　企画展

「渥美半島の縄文貝塚と保美貝塚」

保美貝塚（市史跡）をはじめとする、吉胡貝塚（国史跡）、伊川津貝塚（県史跡）の縄文時代晩期貝塚の、新発見、最新の調査成果を展示します。
期間：平成２８年１０月２９日（土）～１２月１１日（日）　午前９時～午後５時
会場：渥美郷土資料館
入館料：無料

２　シンポジウム

「渥美半島の縄文文化をさぐる～海をめぐる渥美半島の魅力～」

日時：１１月２３日（水・祝）　午後１時３０分～５時
場所：田原文化会館
入館料：無料

３　縄文座談会
「伝え生かそう　縄文遺跡と地域づくり」
日時：１１月５日（土）　午後１時３０分～４時
場所：渥美郷土資料館
参加費：無料
定員：４０名（先着順）

４　ワークショップ
「貝輪をつくろう」
日時：１１月６日（日）　午後１時３０分～３時
場所：渥美郷土資料館
参加費：２００円
定員：２０名（先着順）

（担当）文化財課　増山　電話（0531）27-8604

愛知県田原市

資料№2-2

国民文化祭あいち２０１６「渥美半島の縄文文化をさぐる」補足資料

１　企画展
「渥美半島の縄文貝塚と保美貝塚」

【展示解説】
日時：１１月５日（土）午前１１時～
講師：愛知県埋蔵文化財センター　川添和暁さん

川添さんは、東海地方の縄文時代研究の第一人者。特に骨角器の研究に優れた成果を出し著作〔『先史社会考古学 － 骨角器・石器と遺跡形成からみた縄文時代晩期』（六一書房）〕もあります。全国的な視野で渥美半島の縄文時代の道具、特に骨角器について、最新の研究を聞けます。今回は企画展担当学芸員ではなくゲストの展示解説者としてお願いしました。

２　シンポジウム
「渥美半島の縄文文化をさぐる～海をめぐる渥美半島の魅力～」

シンポジウムは、保美貝塚をはじめとする渥美半島の縄文時代を皆さんに知ってもらうことを目的としています。特に保美貝塚は東海地方で初めて見つかった環状木柱列、30 年振りに見つかった盤状集骨墓、その研究をつうじていろんなことが分ってきました。
シンポジウムの講演者はいずれも、保美貝塚調査の研究メンバーで、日本全体を見通した研究者でもあり田原市の縄文遺跡も熟知している専門家ばかりです。
最新の成果と、これまでの縄文時代観をあらためるようなお話が聞けます。

（１）山崎健さん講演タイトル「渥美半島の貝塚からわかる縄文人のくらし」
山崎さんは、動物と人との関わりを、主に骨を通じた研究、動物考古学を専門としています。学生時代に田原市の発掘を手伝ってくれました。その際に調査研究をした海岸の打上げ貝と貝輪の製作について優れた研究をしています。現在日本の動物考古学を先導する存在です

・氏名：山崎健（やまざきたけし）
・出身地：群馬県
・現在の所属：奈良文化財研究所　埋蔵文化財センター　研究員
・研究分野：人が動物を利用した歴史を研究しています。
・著作・論文：「農耕開始期における漁撈活動の変化－伊勢湾奥部を事例として－」『日本考古学』39、「東海地方における縄文時代晩期の生業変化―地域性と共通性―」『東海縄文論集』、「渥美半島における打ち上げ貝類の研究」『田原の文化』32、「渥美半島における貝輪素材の獲得」『考古学ジャーナル』543
・田原市民にひとこと
10 年ほど前ですが、吉胡貝塚の発掘調査へ参加するため、合計で１年間近く田原に住んでいました。田原に住んでいた頃は、調査前の早朝や調査後の夕方、そして土日の休日に、表浜で打ちあがった貝類を採集してまわりました。縄文時代の

人たちも、現在の表浜で打ち上げ貝類を採集していたからです。そうした経験をもとに、田原市にある吉胡貝塚、伊川津貝塚、保美貝塚の歴史や環境を、皆さんとともに考えてみたいと思います。

・要旨

渥美半島には、吉胡貝塚、伊川津貝塚、保美貝塚という「渥美の三大貝塚」と呼ばれる縄文時代後晩期の大きな貝塚が分布しています。日本列島は火山灰性の酸性土壌と高温多雨の気候により、人骨や動物骨の保存には適しておらず、土の中で分解・消失してしまいます。しかし、貝塚（貝殻の大量集積）は、貝殻に含まれるカルシウムによって酸性土壌が中和されて弱アルカリ性の土壌となるために、人骨や動物骨が良好な状態で出土します。渥美半島の貝塚群は、縄文時代後晩期の生業や墓制を明らかにする貴重な遺跡といえます。

渥美の三大貝塚は、渥美半島の付け根から先端部にかけて「吉胡貝塚（吉胡町）→伊川津貝塚（伊川津町）→保美貝塚（保美町）」と分布しています。採貝活動を比較してみると、吉胡貝塚はマガキやハマグリを主体とするのに対し、伊川津貝塚や保美貝塚はアサリやスガイが主体となります。このように渥美三大の貝塚は、それぞれ遺跡の近くに生息する動物を利用していたことがわかります。ただし、腕輪の素材となるベンケイガイやサトウガイについては、遺跡周辺では獲得できない貝類で、渥美半島の外洋側まで行き、表浜に打ちあがる貝殻を採集していました。

そして、近年の調査研究により、吉胡貝塚や伊川津貝塚は縄文時代の晩期前半が中心であるのに対し、保美貝塚は晩期後半が中心であり、「渥美の三大貝塚」に時期差が認められることが明らかとなってきました。

（２）茂原信生さん講演タイトル「縄文人とイヌは仲良し」

茂原先生は独協医大、京都大学霊長類研究所を経て、奈良文化財研究所の客員研究員を務めています。形質人類学を専門に、古代犬の研究の第一人者です。国立科学博物館の縄文犬、弥生犬の復元の監修を行っています。現在は後進の指導で活躍されています。温厚な人柄と分りやすい解説で学生や若い研究者にも人気があります。基地後貝塚資料館の縄文人、犬の復元の監修もしています。

・氏名：茂原信生（しげはらのぶお）
・出身地：長野県
・現在の所属：奈良文化財研究所客員研究員、京都大学名誉教授
・研究分野：ヒトの進化（イヌも含め）に関する研究
・著作・論文：日本犬に見られる時代的形態変化。国立歴史民俗博物館紀要、第 29 集古代犬の形態と現在の日本犬。遺伝 61（4）形から探る----イヌ。生物科学 58（3）
・田原市民にひとこと

縄文時代以来の日本有数の快適な生活環境に住む皆さんがうらやましい。美味しいものがあり、暖かく（風はちょっと強いけど）縄文時代以来の日本のベストスリーに入る住環境を大切にして、過去から学び、渡辺崋山のような未来に向かえる人を育てる、いっそうの発展を期待しています。

・講演要旨

私たちヒトの最も古い家畜はイヌです。縄文人にとっては家畜はイヌだけでした。狩猟採集生活をしていた縄文人にとっては、狩猟の時の仲間としてイヌは欠かせないものだったでしょう。ですから、イヌの扱いは他の食用の動物とちがってはっきりした違いがあります。縄文時代のイヌはヒトと同じように埋葬されていたのです。

渥美半島は縄文時代の人骨が数多く出土するところとして日本でもっとも有名なところですが、イヌもヒトに負けず劣らずたくさん出土しています。ヒトの埋葬された区域に一緒に埋葬されたりしており、子犬でも埋葬されています。吉胡貝塚のイヌをもとにして、長谷部言人博士（1952）が、日本の古代犬の大きさの指標となるタイプ分けを提言しています。

全国的に見て、縄文犬は現在のシバイヌよりもやや小さいが頑丈です。各地方のものがお互いに似ているといわれていましたが、調べるほどに多様性あったと考えられてきています。大型のイヌはいませんでしたが、小さいものから中ぐらいの大きさまであります。遺伝子の研究でも、渥美半島のイヌにはすでに複数の遺伝子の型（mtDNA のハプロタイプといわれています）が見られています。縄文犬として形は似ていても起原は単純ではないということなのでしょう。

今のシバイヌとの形の違いはどのようなところにあるのでしょうか。ストップという額から鼻先にかけての凹みが小さいのが特徴です。オオカミもこのストップが小さいのですが縄文時代のイヌもストップが小さいのです。もちろんニホンオオカミが縄文犬の祖先と言うことはありません。歯の損傷は、現在のイヌとは比較にならないほどにすごいものでした。折れたり、抜けたり、狩りでの頑張りが見て取れます。

シェルマ吉胡にある復元されたイヌのジオラマを見て、縄文人になったつもりで思いをはせてみてください。

（３）長田友也さん講演タイトル「精神文化からみた縄文時代の渥美半島」

長田さんは、縄文時代の精神文化の研究が専門です。また物質の動きにも注目し、石材の動き、その製作、使用、廃棄など鋭い視点と考察で東海地方の縄文文化の研究を進める期待の研究者です。

・氏名：長田友也（おさだともなり）
・出身地：愛知県生まれ
・現在の所属：中部大学人文学部　非常勤講師
・研究分野：縄文時代の精神文化について研究
・著作・論文など：「後期前半の石棒」『縄文時代』27 号、「小型石棒類からみた保美貝塚」『保美貝塚の研究』など
・田原市民にひとこと

保美貝塚をはじめとする渥美半島の貝塚は、愛知県を代表する遺跡です。大きな貝塚を営むことができたのは、豊かな自然も必要ですが、営むためのしっかりとした規則や考え方が存在したのです。そそこには、渥美半島に生きた縄文時代人の知恵が詰まっています。未知なる縄文人の知恵を解き明かしながら、皆さんと渥美半島の遺跡について考えてみたいと思います。

・講演要旨

保美貝塚をはじめとする渥美半島の貝塚群は、愛知県を代表する遺跡であるだけでなく、全国的にみても屈指の規模を誇る貝塚群です。その特徴は、多くの埋葬人骨の出土に代表されるように、縄文時代人のお墓と評されることが多いです。しかし、それいがにも個々の貝塚から出土する土器・石器といった遺物の量の多さや、さらにはその遺物の質においても他の遺跡ではみられないモノが数多く出土しており注目されます。

その代表が、保美貝塚出土例より命名された石冠や、石剣・石刀、土偶といった儀礼に用いる道具（儀器）です。また硬玉や軟玉といった貴石を用いた石製垂飾、貝塚で大量に作られる貝輪や骨角製装身具など装身具類が多い点も特徴です。こうした儀器や装身具の中には、遠隔地で産出した石材などを用いていることから、それらの原産地からワザワザ渥美半島へ運ばれたものであり、大変な時間と労力を要したことが伺えます。裏を返せば、それだけの労力をかけても儀器や装身具を入手し保持する必要があり、儀器を用いたり特異な装身具を身に着けたりすることが彼らにとって重要な行為あったことが読み取れます。なぜ生活に直接関係のない儀器や装身具を、彼らは求めたのでしょうか。

出土する儀器の多くは渥美半島特有のものではなく、東海地方や中部地方、さらには汎日本列島といったように、広範な地域で共有される儀器が大半です。装身具についても同様の状況が伺えます。つまりこれらの儀器・装身具を用いることは、他地域の集団と世界観を共有し、お互いのつながりを示すことにも意味があったのかもしれません。

豊かな渥美半島の自然を大いに利用するだけではなく、何が縄文時代人にとって重要であったのかを渥美半島の貝塚群は教えてくれるのです。

（４）山田康弘さん講演タイトル「渥美半島の縄文遺跡の魅力と保美貝塚の意義」

山田さんは新進気鋭の縄文研究者で、縄文時代の葬制を研究されています。最近立て続けに著作を発表しています。近年では文部科学省の科研費で保美貝塚の発掘を平成２２年から２６年まで行い、現在は人類学、考古学の研究者とチームを組み研究を進めています。そろそろ、その最新の研究成果が発表されます。

・氏名：山田康弘（やまだやすひろ）
・出身地：東京都生まれ
・現在の所属：国立民俗博物館考古研究部・総合研究大学院大学　教授
・研究分野：縄文時代の墓と墓から分る社会構造を研究しています。
・著作・論文：「つくられた縄文時代」（新潮社）、「老人と子供の考古学」（吉川弘文館），「縄文人がぼくの家にやってきたら?!」（実業之日本社）など
・田原市民にひとこと

風光明媚な田原市は，縄文時代においても多くの人々が集う，素敵なところでした。田原市内の貝塚から出土した人骨や遺物は，日本考古学における初期的研究を牽引したことで，学会では大変有名です。皆さんの身近にある「たからもの」を通して過去を学び，現代社会における様々な問題についても，私と一緒に考えてみませんか

・講演要旨

田原市内にある貝塚，とくに吉胡貝塚や伊川津貝塚，保美貝塚といった縄文時代晩期を中心とした貝塚からは，たくさんの縄文時代の人骨が出土しており，日本広しといえども，田原市内の貝塚ほど一つの遺跡からたくさんの人骨を出土するところはありません。また，縄文時代の人々が亡くなってから，すでに数千年もたっているので，普通でしたらなくなってしまい，残っていることは，まずありません。しかし，田原市内の貝塚から出土した人骨は保存状態がよく，そこからたくさんの情報を得ることができるために，縄文時代の人々がどのような人々だったのか，どのように生活をしていたのかという考古学・人類学の研究を行うのに非常に適しているのです。そこで，縄文時代を研究している考古学者たちは，吉胡貝塚・伊川津貝塚・保美貝塚の三つの貝塚を，敬意を込めて「田原の三大貝塚」と呼んでいます。

このような研究上優れた点があるために，私たち考古学者・人類学者・年代学者たちは研究チームをつくって，保美貝塚の発掘調査を行うことにしました。

２０１０年から２０１５年にかけて，合計５回の発掘調査を行いました。その結果、人骨の集積埋葬例を１例，成人男性の屈葬例を１例見つけることができました。今回の講演では，渥美半島の縄文貝塚の魅力と私が行った保美貝塚の発掘調査の様子と，これらの資料を分析してわかったことを，考古学的な見地からお話します。

３　縄文座談会

「伝え生かそう　縄文遺跡と地域づくり」

・ゲスト：宮城県東松島市奥松島縄文村歴史資料館　名誉館長　岡村道雄さん
館長　菅原弘樹さん

縄文遺跡の魅力は？どのようにその魅力を伝えるか？この座談会は、専門家が考古資料の話をするものではなく、遺跡を楽しむためにはどんなことができるか？という内容です。

岡村さんは長く文化庁で遺跡の保護、史跡整備の指導をしてきた有名人です。著作、テレビ出演なども多く、わかりやすい言葉で縄文時代の魅力とその楽しみ方を伝えます。吉胡貝塚にも何度か指導に訪れ、吉胡貝塚の整備にも携わっています。自ら「杉並の縄文人」と称し、縄文以来の日本人の文化を自ら遂行しています。

菅原さんは、学生時代に携わった里浜貝塚の思いを、現在の資料館の運営と貝塚の保護に力を注いでいます。バイタリィティ溢れる行動力で、豊富な体験メニュー、地元の人たちと盛り上げる手法はお手本となるものです。また、東北の復興にも尽力をしています。

両人とも教育だけでなく縄文を地域振興に生かす取り組みを進めています。この縄文時代の遺跡を楽しむエキスパート 2 人をゲストに迎え、全国の事例などの紹介と、今後縄文文化、遺跡を学びながらどのように地域に生かして行くかを会場の皆さんとディスカッションをしていきます。圧倒的な知識と、斬新な発想で、田原市の地域づくりに刺激を与えてくれるでしょう。

地域の問題として、自然資源の保全と活用、それらを生かしたまちづくりにも生かせるよう、地域の方の参加を呼びかけます。

愛知県田原市

岡村　道雄(おかむら　みちお)さんプロフィール

経歴
東北大学文学部助手、宮城県立東北歴史資料館、文化庁記念物課、奈良文化財研究所、この間９５年度より『発掘された日本列島展』企画、縄文まほろば博』展示実行委員会、考古学ジャーナル編集委員、日本文化財科学会評議委員など歴任、大学の非常勤講師を務める。奥松島縄文村歴史資料館名誉館長、奈良文化財研究所名誉研究員。
現在の職務
① 内丸山遺跡発掘調査委員会委員長、②縄文遺跡群世界遺産登録推進専門家委員会委員、岩手県一戸町御所野遺跡指導委員会委員長、④岩手県奥州市大清水上遺跡整備指導委員会委員、⑤東松島市特別名勝松島保存管理委員会委員長、⑥滋賀県下之郷・伊勢遺跡指導委員会委員長、⑧下之郷遺跡保存管理委員会委員長、⑨是川縄文館運営検討委員会委員長⑩上越市釜蓋遺跡発掘指導委員会委員長など)
著書　２０００年以降
『AOKI　RIBRARI　日本の歴史１　日本列島の石器時代』青木書店　２０００
『課外授業ようこそ先輩　やってみよう縄文生活』ＫＴＣ中央出版　２０００
『改訂版　講談社　日本の歴史１　縄文の生活誌』講談社　２００２
『日本の美術　縄文人の祈りの道具―その形と文様―』至文堂　２００９
『縄文の漆』同成社　２０１０
『旧石器遺跡捏造事件』山川出版　２０１１
『集英社新書　縄文人からの伝言』２０１４
『別冊宝島　岡村道雄が案内する縄文の世界』２０１５　ほか多数

４　ワークショップ　　貝輪をつくろう

最近の研究で、渥美半島では大量の貝輪を作る全国でも稀な地域であることがわかりました。田原では今でもこの貝輪素材が拾えることができます。田原市ならではの体験です。

貝輪素材となるベンケイガイを叩いて穴をあけてリング状に整え、腕輪とします。当時は適当な大きさ、形の良いものを拾うことがポイントでした。また失敗をしないよう作ることはコツが必要です。縄文人の技を学ぶことができるでしょう。